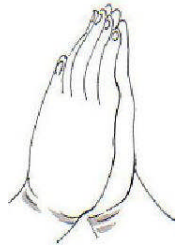


\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 山男の負い目



毎年秋、穂高に逝った仲間を慰霊するために上高地に通っている後輩達がいる。30年もつづけていると言う。私もその遭難については克明に記憶している。年の瀬の12月26日、先輩から「現役が雪崩に巻き込まれて一人が見つからない。すぐ来てくれ」と電話をもらって家を飛び出した。先輩宅に私、山猿、角谷が集まり、先輩のパジェロを借りてアイスバーン化した名神高速を走り、名古屋で和田先輩を乗せ、先発隊4名は上高地へ急いだ。早く救助活動を行い命だけは救いたい、張り詰めた空気が私達を包んでいた。冬季通行止めの為に閉門されたゲートを真夜中に開けてもらうことが二度。ようやく釜トンネルに車を乗り入れたが、出口は閉ざされて進めなくなっていた。1mを超える数本の巨大なツララが行く手を阻んでいる。救助用具などを背負い膝までもぐる新雪をラッセルしながら上高地へ急いだ。午前1時ごろ遭難現場に着いたが、天気が悪く二重遭難の可能性があるので、夜明けを待つ事にした。和田、山猿、角谷の3名が現場に残り、私は助かった学生8人が避難している山小屋へ下った。午前2時ごろ県警や地元山岳救助隊20名が小屋に到着し明日からの捜索について協議した。その後、追加の3次捜索隊を京都の本部に要請した。翌朝に第二次捜索隊5名が小屋到着、第三次隊5名も昼に到着した。総勢35名の捜索の結果、午後2時ごろ遭難者を遺体で発見。寝ているような穏やかな死に顔であった。

当時コーチであった山猿は「最初、学生が山行計画を持って来た時、雪崩が起きたら逃げようがないから、このルートはやめろ、と言ったのだが、『アプローチに使かわれる一般ルートだし、積雪と天候を見極めて偵察もしますから』と押し切られた。この悔いは生涯残る。9人が雪崩に遭い一人だけ助からなかった。しかも一年生だ。残された家族に会うたびに、深い悲しみとともに山岳部に対する怒り、恨みのようなものを感じた。なんで、うちの子だけが…という思いが消えなかったのだろう。とりわけ母親の悲しみは深かった。その母親も亡くなった。自分に出来ることは、せめて慰霊碑を毎年訪ね、彼を我々の中に甦らせて新たに心に刻むことだ」。山猿の言葉は私の胸に重くこたえる。

遭難事故は必ず起きる。リーダーの責任は重い。学生達を指導する立場の監督・コーチは結果責任を当然求められる。責任とは別に幾多の負い目を背負わなければならない。その負い目が背負いきれずに人生を狂わせたと思えるような人もある。秋の穂高に通い続け慰霊碑に手を合わせる、言葉にすれば単調な行為だが長年つづけることによって、後輩達の心の荷が少しずつ軽くなっている事を祈る。(嘉)

## 連載 爺捨て山33

梵店主

歳を重ねなければわからない事は多い。自分がその立場に近づくに従い「ああ、そうだったのか」とうなずくのである。どんな言葉も聞く耳を持たぬ者には、唯の空聞きになってしまう。

私は還暦を過ぎて益々迷って困る事が多いが、その際、思い起こすのは祖父や父母、先輩・友人らの言葉である「なるほどなあ、そういう想いで言っていたのか」と考えるのである。何気無く吐く言葉。相手を想って考えた言葉であっても、聞く人の心の状態によって良くも悪くも聞こえるものだ。

血液検査の数値を見ながら医師は、「これは異常に高い。心筋梗塞か筋ジスになってもおかしくない。」と切り出された私は「えっ」と真剣になった。高血圧や糖尿、肝臓等の症状ならいつもの事と軽く聞き流したが、この時ばかりは真剣にならざるをえなかった。

ところが、原因がわからない。考えあぐねた医師は、「酒の飲みすぎかもしれないから、とりあえず控えてもらって数値の変化を見ましようか」という。この時は、素直に従うことにした。

死ぬと言われれば、誰しも真剣になる。もし、この心境で人の話を聴けばどうだろうか。今の私は、妻の些細な愚痴も重く受けとめる気持ちです。

## 《ヒマラヤへの道 25》

## ガルムツシュ峰 ⑩

梵店主

1977年8月26日、午前10時半、よっちゃんと由べえは、ガルムツシュ峰6244メートルの頂上に立った。天気は曇り、気温6度。風弱く視界もよく、雲の切れ目から遠くの山々が見えた。

山頂で記念撮影をする。パキスタン国旗や校旗を出して写す。これらの事を手際よくして早く下ることを、よっちゃんは登ったときから考えていた。天気がいっ悪くなるかわからない。高度障害が起きるかもしれない。気温が上がって氷が溶け出し雪稜が腐るかもしれない。落石の巣のようなルートが無事通過できるだろうか。いくつもの不安がよっちゃんの頭に浮かんでいたのであった。

早く下りたい思いのよっちゃんは、山頂からの眺望も十分に楽しめずにいたが、由べえは、はしゃぐように「日本でヒマラヤの山の頂に立った人は多くない。ほんとに登れてよかった」と言いながらザックから大事そうに小さな小瓶を出した。よっちゃんは、そろそろ下りようか、と言い出そうとした時である。

「下村さん。実はね。僕、遭難した先輩

の家にいった時に、先輩のお母さんから、『息子は穂高でなくなったが、いつもヒマラヤに憧れていた。7年前のダウラギリ1峰の遠征隊に参加して8000メートルまでルート工作したが、頂には登っていない。もし、あなたが頂に立てたら息子の遺骨を埋めてきてやって欲しい。好きな山々を眺めながら天空に遊べるように』と言われたんですよ」

よっちゃんは、由べえの話聞くまで知らなかった。由べえの思いもよらない優しい心遣いに胸が熱くなった。気づかなかった多くの人がよっちゃん達の遠征隊を支援して期待してくれていた事を改めて考えた。

40分ほど頂上にいて下る。ピーク直下の氷壁をザイル頼りに下って岩稜や落石の巣である箇所も素早く通過してキャンプ2まで帰って来た。テントに着くと緊張感が一気に薄れ登ってきた嬉しさがわいてくる。もう登らなくてもよい。危険な箇所も少ないから安心だ。

明日は、隊長と山猿が頂上を目指す。彼らはもうすぐキャンプ2へ登ってくる。よっちゃん達は、テントが狭いのでキャンプ1まで下る。用具も最低限度のものを残し荷下げする。この作業が大変であった。ロープが重い。疲労した身体に背負うロープは棄てていきたい、と幾度も思った。

元気だった由べえも、疲労の極にある。

「こんなの棄てていきましょ。誰も来ませんよ、こんなとこまで。もう担げませんわ」と言いながら急な雪の斜面をフーフラしながら下っている。よっちゃんも棄てて軽くしたい思いは同じであった。しかし、一昨年登ったオーストリア隊は登った痕跡を何も残していなかった。見つけたのは岩陰にあった小さな缶だけだった。それで「ゴミ一つ残してはいけないんだなあ」と思ったのである。

明日も荷下げで登ってくるのだが、出来れば出来るだけ多くの荷を下げたいよっちゃんの思いが由べえを苦しませていた。キャンプから二時間ばかり下ったところで、よっちゃんの前を行く由べえが、とうとう怒り出して、80メートルあるロープをザックから出して、斜面にほり投げた。それを見たよっちゃんは、由べえに対して何も言えなかった。言う元氣すらなかった。しかし、ロープを棄てたままにして置けないから、よっちゃんは自分のザックの上にのせる事にした。黙ってしばらく下ると、由べえは、またザックから残りのロープを出して、独り言を言いながら棄てた。よっちゃんは、また黙って、それを拾い上げ自分のザックの上にくくった。よっちゃんの荷は果てしなく重く感じられた。高度の影響か、疲労のためか意識朦朧で滑るように歩いていたのである。

## 義兄とその家族(22)

「ガン患者には、暑い時より寒い時期の方がこたえんねん」と、我が姉ちゃんと言う。ガンなのは自分ではなく夫だが、そこらへんの境界線がなくなるのが夫婦なのだろうか。それに、そもそも義兄は今もガンなのだろうか。「身内のことなのに、わからんか？」と思われそうだが、本当にわからない。とにかく、入院加療中ということではなく、月に1回成人病センターに通院してはいるが、それ以外、病人っぽいところは特になく、ピンピンしているように私には思える。

義兄には悪いが、若い時から元氣はつらつ、という人ではなかった。痩せているし、神経質そうなので、「どこか、悪いん？」と聞きたくなるようなところが元からあったので、ガンで極端に痩せていた時期も、比較的、違和感がなかった。

それに、抗ガン剤で、一旦抜けた髪が生え変わったのだが、その髪が真っ黒でつやつや、白髪1本ないから、若返ったように見える。義兄は白髪はない人だったが、新しく生えてきた髪は、やつぱり、「生えてきたばかりです」という若さが感じられる。坊主にして、間違いない、新しい髪がふさふさと生えてくるなら、試す価値あるかと思うくらいだ。今日も姉が言っていた。「通院で、抗ガン剤治療をしていたときは、シンドイ言

うて、昼間でも、横になってたけど、もう、そんなこと全然ないもん。ここ1年、何のために、居間にベッドを置いてるんか、わからへん」。

それなら、寒い時期はこたえる、とはどういう意味だろう。元気な者だつて、寒さはこたえる。

実は、「寒いのはこたえる」というのは、二つ意味がある。一つは、去年の冬、義兄は、姉に湯治に連れて行かれて、体調を崩し、胸が痛いと言っていた。それは、幸い、再発ということではなかったが、「寒いと痛いんだよな」と義兄も言っていた。どうやら、肺を患うと、寒いと痛むというのは、よくあることらしい。

もう一つは、姉の食養生を、つまり、姉が義兄に強いている食養生が、寒いと思うように進まなくなるのだ。早い話、喉が渴かないから、「たっぷり飲めない」のだ。健康によいとされる水を、姉はどこやらから取りよせているが、「毎回、10リットル3本、それが減れへんねん」。この水は、ただ飲むだけではなく、例によってローズヒップティーだか、生姜紅茶だかになるのだが、義兄の飲みっぷりが悪くなるので、今日も姉はえげつないことを言っていた。「暖房、がながんかけて、喉が渴くようにしたらなアカン」。

誤解のないように言わせてもらおうが

うちの姉はエコモードな人である。つまり、始末屋で、余分に暖房つけるなんてもつてのほか！ というヒトである。それに、自分の懐が痛まないときでも、暖房や冷房を強めにかけるのは大嫌い。地球環境もさることながら、ご自分の美しいお肌が乾いてしまいそうだからだ（もちろん、ウソ。そんな年齢では、そもそもない）。だが、肌を気づかっているのはホントで、たとえば、お蕎麦屋さんなどで、うっかり、冷房や暖房の強い風が当たる位置に座ると、「アンタの席と替ってくれへん？」と頼まれる。私だってイヤだが、姉ほどには気にならないので、「別にええよ」とごそごそ立ち上がる。そんな姉が「暖房がながん付けて汗だくにしたつたら、喉、渴くやろ」と言っているのだ。そんな冗談でしょ、と思う人は、私の姉を知らない人だ。

この冬、姉の家を訪ねたら、きっと異常に温度が高い部屋の中で、姉は顔にベトベトに保湿クリームを付けて、せっせと、義兄のガン退治用（と自分が信じている）飲み物やら食べ物をこしらえているはずだ。

ご苦労様なことである。姉は何気なく言うのだが、私にはおかしくてたまらない、ということがよくある。今日も言っていた。「義兄は」私が用意する、高いサプリメントは全部、効けへ

ん思ってるねん」。ロイヤルゼリー、プロポリス、活性酵素。姉は、まず、山のようにパンフレットを集めて、ひたすら吟味すること、そういうモノについては、価格など二の次、三の次。天然原料にこだわり、まかり間違っても、インチキ商品をつかまされることがないよう、発売元や販売元を確かめ、（サントリーや小林製薬などの大メーカーのものが良いと思っているわけではない。ビールの片手間に、あるいはやたらにいろんな種類のサプリを大衆相手に作っているような会社のものなど、ガンという病と闘う武器にはならないと姉は信じているからだ。姉は言う。「あんなはな、元気な人がもつと元気になりたいと思つて飲むもんやろ。なんせ、こっちはガンやから。そんじよそこらのもんではアカンわけですよ」）、可能ならば、実際に飲んでどうだったかを、誰かに聞こうとまでする。

素人の私にも相談の電話をしてくる。これは別に、意見を聞きたいわけではなく、自分の考えを私に聞かせるためだ。一応、マナーとして、「で、アンタ、どう思う？」と言ってくるときもあるが、聞いてない、というのは丸わかり。私が「ニューヨークの株価格次第かもね」とあさつてなことを言っても、多分、「そやろ、だから私はな・・・」と自分の言いたいところに戻っていくに違いない。

それぐらい聞いていない。今回のテーマはキダチアロエだった。「ベラの方ね、ベラ！（ベラがつかないものは、キダチアロエにしてキダチアロエではないらしい。どんなものだが、私にはさっぱりわからないのだが、そういうニュアンスに聞こえた）、それも濃縮還元なんかではなくて、100%生のやつやで。それを、説明書には1日100CC飲んで下さいと書いてあるねんけど、私は、一日三回に分けて30CCずつ、飲ませてねん。その方が、いっぺんに飲むより体にええやろ」。

こうして、書いていて気がついたのだが、そんな話をしてるとき、姉は幸せそうだということ。夫のガンという恐ろしい病気に勝てる可能性がある。成人病センターの医者たちには、一切、感じなかった、救いの切り札が姉の手の中にある。さあ、どれを選ぼうか、とわくわくしているようだ。この場合は、キダチアロエベラのなかのどれかで、こんなときに、人参ジュースはどうしたん？ とか、聞いてはいけない。姉の関心の対象が変わってしまっているからだ。あんなに凝っていた人参ジュースは、今は止めてしまっている。義兄の命綱だと、確か、姉は言っていたが、その命綱なしで、義兄はピンピン生きている。（つづく）

ドイツ時代⑥ (70年12月〜75年5月)

土田 裕

## デンマークの病院

デンマークは人口五五〇万人の小国であるが、福祉が充実しており、幸福度は世界一といわれる。

ブリジストン・タイヤの代理店はデンマークのオーフスという町にあった。デンマークではコペンハーゲンに次ぐ第二の都市でユトランド半島にあり、ドイツとは陸続きなので、ハンブルグから車でも行けた。ブリジストンの商売だけを見れば人口四千万人のドイツの倍以上の売り上げをあげていた。ドイツ向けが乗用車用タイヤしか売れなかったのに対し、価格が高いトラック・バスタイヤが大半を占めていたせいもあるが、ある時点から支払いが滞るようになったので現地調査を行ったところ一年分以上の在庫をかかえていることが分かった。結局はブリジストンと三井物産でその在庫を買取り、現地販売会社を設立することになったが、今回はその話ではない。

一九七二年夏、コペンハーゲンへ家族旅行をした。長女はまだ二歳だったが、短期の旅行だったので連れて行った。最初の晩、突然、長女が「ぎゃー」と

と大声で泣きだした。ホテルの湯沸かし器で湯を沸かしていたところ、娘が触って熱湯が肩にかかり大やけどをしたのであった。あわててホテルに救急車を呼んでもらい救急病院へ連れて行った。幸いやけどは上半身の一部だけで顔は大丈夫であったが、一晚娘だけが病院に泊まることになった。

翌朝、病院に迎えに行つて勘定をしようとしたら、無料だという。もちろんパスポートなど身分証明書は持つていなければ駄目だが、デンマークでは外国の旅行者が旅行中に怪我をしたり急病にかかった場合、治療費はすべて無料ということであった。

消費税が異常に高く(確か二十%であった)、老人・子供の福祉が充実していることは知っていたが、旅行者に対しても国民の税金を使ってサービスしていることになる。

それから十七年後、ニュージージーランド旅行中に、今度は女房が指を車のドアに挟んで救急病院で手当てをしてもらったことがあるが、この時も無料であった。

## 家族旅行

欧州に駐在する最大のメリットは人も言葉も全く異なる様々な国に簡単に旅行ができることだと思う。私も仕事では西欧・東欧の殆どの国に出張した

が、夏休みやクリスマス休暇には家族でイギリス、フランス、スイス、オーストリア、イタリア、スペインなどを旅行した。小さい子供を連れての家族旅行は、どこの家でも同じだと思うが、毎回なんらかのトラブルが起こり苦勞することになる。前項のデンマークではやけどであったが、ある年、クリスマスの時期にパリへ行った時のことである。

パリ空港に着いて荷物引取り所でスーツケースを待つても一向に出てこない。ついに諦めて次の便に到着したらホテルに届けてくれるように係員に依頼した。おむつやミルクなどはスーツケースの中に入れていた。女房が子供の面倒を見ようにも、ホテルにチェックインした時刻が遅いのでドラッグストアなどはとくに閉まっております。荷物が到着するのを待つしかなかった。

三時間くらい待っても荷物がつかず、とうとうしびれを切らして空港に電話したら、次の便はすでに到着し荷物は市内の貨物ターミナルの方に発送したという。すぐさまタクシーを呼んで貨物ターミナル(確かアンバリッド・廃兵院の地下にあった)へ行った。

事情を告げて荷物の集積所へ案内してもらったが、沢山の荷物が積んであり、どこに我家のスーツケースがあるのか

全く分からないので、諦めてホテルへ戻つたところ、スーツケースの方が先に着いていた。

結局五時間くらい無駄な時間を費やすことになったが、このとき以降、子供の食べ物、オムツなどその日のうちに必要なものは、必ず手荷物の中に入れるようになった。

さてパリで三日間過ごして、次の目的地であるスイスのチューリッヒに向かうべく空港に行ったが、天候不良でいつまで待っても飛行機が出ない。結局そのフライトはキャンセルとなり、代わりに車でチューリッヒへ行つてくれという。欧州の冬の天気は変わりやすく、飛行機便の遅れは日常的に起こるがキャンセルになつて汽車で代替された経験はこのときが最初であった。

家族三人だけで一つのコンパートメントに入れてくれ、今度はミルクやオムツまで差し入れてくれた。日本の飛行機会社でもそうだと思うが幼児と一緒に旅行の場合には非常にサービスが良いことが分かったので、その後は遠慮せず子供連れであることをスチュワーデスに申告するようにした。

娘は四歳半までドイツにいたので、イタリア、スペイン、オーストリアなどすべての家族旅行に連れていったが、当然のこととはいえ、小さかったので今は彼女の記憶には全く残っていない。

# 永遠なれ！ わだつみのこえ

具志 清

私の手元に、一九九七年刊、ワイド版岩波文庫『新版 きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』がある。私の文は、本書に基づいて進めさせて頂く。巻頭に、読者への文がある。

一九四九年に発行された『きけ わだつみのこえ』は、大きな感動をもって迎えられ、戦後平和運動の源泉となった。そして、「現代の古典」という声価を得るにいたっている。

戦後五十年、この節目の年にあたって、新しい読者へ、新版をおくる。(中略)

この新版を刊行するにあたって第一に念頭にのぼるのは、つねに若い世代の読者である。若い皆さんが、本書から不戦、反戦平和の遺志をうけとり、あなたの生き方、社会や歴史の見方の糧としてくださるよう心から願う。

日本戦没学生記念会(わだつみ会)

一九九五年十二月一日

私も、かつては若い読者の一人であったわけだが、八十路を歩き始めた今、再読し、あらたな感動を深めるばかりである。俗な言葉で表現させてもらえば、痛々しくて読むのが辛いのである。

しかし読まねばならぬ。感慨を書かねばならぬ。

一九四七年、本書の前身、東大戦没学生の手記『はるかなる山河』が、東大協同組合出版部から出版された。私は、その本は読んでない。当時二十万部以上発行されたそうである。しかしこの本は東大一校に限られていた。全日本版を刊行することになり、全国の大学、高専の戦没学生の遺稿が寄せられ、三百九人の中から七十五人が選ばれて、一九四九年(昭和二十四年)九月、『きけ、わだつみのこえ—日本戦没学生の手記—』の初版が刊行された。その後、度々版を重ねた。

本書の中の戦没学徒は、最年長は、満年齢、三十三、最年少、十八、平均二十二である。私は、全ての手記に胸打たれたが、ここに幾人かの文章を妙記したい。

上原良司。一九二二年(大正十一)九月二十七日生。長野県出身 一九四三年(昭和十八)慶應義塾大学経済学部入学 十二月一日 松本歩兵第50連隊に入隊 一九四五年五月十一日、陸軍特別攻撃隊員として、沖縄嘉手納沖の米機動部隊に突入戦死。陸軍大尉。二十二歳 (以下、本書の経歴を、多少省略して記す)

この人の手記が、本書のプロローグになっている。略歴で解るように、大学入学の年に学徒出陣し、およそ一年半後に戦死している。

所感

栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいうべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄これに過ぎるもなきを痛感致しております。(中略) 権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であるとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。(中略)

愛する祖国日本をして、かつての大英帝国のごとき大帝国たらしめんとする私の野望は遂に空しくなりました。真に日本を愛する者をして立たしめたなら、日本は現在のごとき状態にはあるいは追い込まれなかったと思います。世界どこにおいても肩で風を切って歩く日本人、これが私の夢見た理想でした。(中略)

飛行機に乗れば機械に過ぎぬのですけれど、いったん下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、情熱も働きます。愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的には死んでおりました。天国に待ちある人、天国において彼女と会えると思ふと、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。

明日は出撃です。過激にわたり、もちろん発表すべき事ではありませんでしたが、偽らぬ心境は以上述べたごとくです。何も系統だてず思ったまま雑然と述べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。

言いたい事を言いたいだけ言いました。無礼を御許し下さい。ではこの辺で。 出撃の前夜記す

自由主義者としての確固たる信念を喝破し、祖国日本の未来を憂慮している。

『愛する恋人』は、どのような女性だったのだろうか、その人と天国での再会を信じ、敵艦へ突入したのであるうか。その心情を付度すると、胸が痛い。

篠原二郎。この人が最年長である。一九一〇年(明治四十三年)三月二日生。奈良県出身一九三五年(昭和十)同志社大学文学部英文科卒業 一九三八年四月、補充兵として応召、中国の華中へ従軍。一九四〇年五月応召解除、一九四一年八月再度応召 一九四四年一月十八日、当時イギリス領東部ニューギニアにて戦死。陸軍歩兵伍長。三十三歳

中国を転戦しつつ書いた日記の一日



分、父親への手紙一通、夫人への手紙三通が掲載されている。ここでは、夫人への手紙を妙記する。

(昭和十四年三月十五日付 寿子夫人への手紙)

復興都市之市も相変わらず潜入分子活動し全市は悪化しつつあるようだ。上海のテロ化と相通じて。(中略)

今夜は月の美しい夜だ。征旅の身に、戦友の不幸、自分はもし！妻はどうなるだろう……。生涯自分の妻であってほしい、永遠に。ひとりよがりかなあ月にものを。言っただよ、失礼。

夫人への手紙の第一信に、多くの戦友が戦死した不幸なニュースを書いた後、このように書き終えている。

すぐれた小説家でも、製作の文章では書けない純心な愛の手紙である。

(昭和十七年三月三十一日付 寿子夫人への手紙)

北朝鮮には春が訪れてきた。中支への最初の応召の時と違って、子供という何よりも美しい愛の結晶物を得ている現在、吾々は海超え山超え相離れていても、以前に増して心温かいことを感ずる。(中略)

最近文部省が中等学校の英語を廃するとの記事を見たが、何んともいえぬ為政

者への反感を感じるのだ。アメリカでは日本との戦争が起こってより日本研究熱がきつとはげしく台頭しているに違いない。敵に勝たんとする者、敵をよく知らない。敵に勝たんとする者、敵をよく知らない。敵に勝たんとする者、敵をよく知らない。

つと普及し、一層敵国を国民一般に知らさなければならぬ時だと声を大にしていいたい。

かつて中支にて新聞班に活動していた際、参謀へ毎日英字新聞の特に大切と思

われる記事にアンダーライン引き翻訳して、毎日提出したが、あの際だって戦争責任者よろしくこの方面の知識を自分で得られんことを念じたのだったが、今こうした事にたいしてさらにその感を深くせざるを得ない。淋しい至りである。

いかにも英文学を修めた知識人らしい炯眼である。当時の為政者どもに読ませてやりたかった。

(昭和十七年師走 寿子夫人への手紙)

戦況日々激しい南の戦線に出ることになる。もとより待機していた身には当然かも知れぬが、直面してみればやはり征衣の凡々兵である。否、凡人以下の間である。目をつぶってみる。頭に浮かぶのはものは愛らしい子供、妻、父、母、妹等々。門出の前夜「私を未亡人にしてはいや」といったきみの顔が、目が忘れられない。(中略)

られない。(中略)

ただきみに願っておくことは、我が生死の問題を超越して常に、きみが結婚当初の感激に生き心身ともに理知美と健康に生きていてくれる事のみです。

(中略)

留守居の安泰を祈る事は結局きみと愛児の無事を祈る事であり、きみと克子とへの愛着である。もちろん自分をかくあらしめてくれた両親への限りなき感謝は別として。(中略)

生命への自信をもって南へ征くつもりだ。どうか現在のきみのままで良い。そのままの精神と健康がほしい。静かな中に情熱に生き、情熱の中に静かな性質の持ち主であってほしい。(中略)

国力を疑うことなくひたむきに、この大みいくさ捷ちがためにいく一人としての任務に強く征くこととする。

祖国に残した家族への愛を胸に抱き、唯、ひたすらに、勝利を信じ、戦場へ立ち向かうこの学徒兵の信念と覚悟は見事である。

網干陽平。この人が最年少である。一九二六年(大正十五)九月五日生。兵庫県出身。

一九四四年(昭和十九)大阪外事専門学校(戦後、大阪外国語大学、現、大阪大学外国語学部)入学。一九四五年



昭和18年の学徒出陣壮行会

七月七日入営。一九四五年八月八日、敵魚雷攻撃を受け、日本海にて羅津丸と共に沈没戦死。陸軍一等兵。十八歳(勤務動員中の日記より)

(昭和二十年五月八日 火曜 雲 寒)

南進の夢儚く消えて敵の上陸に競々としている。マライ語も英語も棄ててしま、一介の事務員として兵士の卵として平凡な日々を過す、この心持。特別甲種幹部候補生は歩兵を希望した。命は惜しい。しかし俺は死なねばならぬ時は徒に興奮などせず、従容と死ぬる自身はある。まだ諦められる。今まで生きて来たことさえ、何の辱めも思わずに来た事さえ、俺には奇跡だと思われる。人類発足より現在まで全て闘争の歴史で一杯なのだ。愛といい、恋という中にも男女間の闘争が繰り返さ

れているのだ。(後略)

勤務動員中、とあるから、この日記を書いた日々は、まだ軍服を着ていない、と思われる。しかし二ヵ月後の入営は予定されていたのであろう。平凡な日々を過す”中に、胸中、揺るぎない決意を秘めている。

この少年(私は、敢えて、そう呼ぶ)は、大陸へ渡る日が一週間でも延期されていたら、生きて終戦を迎えたであろう。そして復学し、学業を続け、卒業後は、商社マンとして海外で活躍したであろう。

乗船した羅津丸について、近隣の図書館で調べた『太平洋戦争 喪われた日本船舶の記録』(宮本三夫著 成山堂書店)に拠ると、羅津丸は五千四百余トンの貨物船である。船員三五人、隊員一一五人が犠牲になったようである。千百余の隊員の中に、この少年と同年齢の戦友が数多く含まれていたであろう。

私のこの文章は、『きけ わだつみのこえ』の読後感に過ぎないが、意図するところは、自分の感動を少しでも、まだ読んでいない人へ伝えたいのである。今回は、三人の手記の、それぞれ一部を書かせてもらった。次回も幾人かの手記を重ねて読みたいと、思う。

「芥川」考 (二)

## 歌枕・芥川

大江雉兎(おおえちつと)

前回は前振りのみで終わってしまったのだが、芥川の歌枕としての姿を検討してみる。歌枕とは、古典和歌でよく用いられる地名のことで、往々にして特定のイメージが付着している。前回、例にひいたケースでいえば、「塩竈」という地名が出てくると、小舟、海人、煙などがともに用いられた。

それでは「芥川」の場合はどうだろう。「人をとくあくた川てふ津の国の名にはたがはぬものにぞありける」「月影に我をみしまの芥川あくことや君がおとづれもせぬ」などはよく紹介される例歌である。一首目は、「人を疾く飽く」「名には違はぬ」で、私のことがもう嫌になったの?、飽きっぽいとの評判に違わぬ方ですね、との内容を伝えるとともに、「芥川」「津の国」「難波」の地名をちりばめる。二首目も言葉遊びの側面が強く、「月影に我を見し間」で、月の光に私の顔を見たという内容、「飽くとや君がおとづれもせぬ」で、私が嫌になったのでしょうか、お便りが途絶えてしまいました、という内容をあらわし、その二つを「三島の芥川」が繋ぐ仕掛けである。

二首に共通するのは、芥川が同音の「飽く」を連想させていることだ。古文単語の「飽く」は、満たされた気持ちが行き過ぎた結果、嫌気が差してくる、の意味。さらにいえば、歌枕「芥川」に導かれる「飽く」は、前掲の二首もそう、男女関係での気持ちの移ろいを言うことが多い。さらにさらに付け加えるなら、その中でも、男の心変わりを女が語る文脈になるのがほとんどなのである。

王朝時代の男女関係は、男の側がある手この手を尽くしてアプローチを掛けることから始まる。相手の姫君に仕える女房や侍女を籠絡しておき、文を託すのである。そして機が熟すのを見計らい、手引きを受けて閨に忍ぶという流れである。恋文のみの段階では、おのずと熱っぽい言葉が重ねられ、女の側からの返事で気持ちも昂揚する。だが目的が達せられると、感情のバロメーターがもとの値に戻ることもあったらしい。「飽く」という言葉が登場するのは、まさにそうしたシチュエーションで、「見飽く」「思ひ飽く」といった複合語になるケースもある。例歌の二首目、「月影に」の歌は、その典型例である。言葉遊び的な側面が強いので現代語にすると味わいは半減するのだが、あえて逐語訳をすれば、こんな感じだ。

「月あかりの中で、あなたは私の顔を見てくれましたね。ちらりとみてくれたその一瞬でお気持ちは覚めたのでしょうか、あれ以来、お便りはいただいております。三島の芥川ではありませんが、私を見し間に飽きたといったところなのでしようね」

現代語で読むと、なんといい加減な男かと憤るフェミニストもいるだろう。しかし、こうした内容は額面どおりに受けとるものではない。というのは、言葉の連鎖で相手の気持ちを刺激することに主眼があるからで、手紙が恨み言めいていても、それに男の心が動かされるのは、物語の世界では、これまたよくあるケースなのである。

撰津の国は三島の郡の芥川。「飽く」という言葉を連想させるこの地名は、そうした微妙で際どいやりとりに使われてきた。地名の芥川を問題にする時、江戸時代には西国街道の宿場駅となっていた事実があるため、歴史空間的なところに目が行きがちになる。鎌倉時代には御家人の芥河氏が勢力をもち、戦国時代には芥川古城が云々というのは、そうした流れでの説明である。地名辞典などにあるそうした説明も大切なのだが、それと異なると、イメージの領域で使われていた言語空間の「芥川」も忘れるわけにはいかない。その最たるものがある。「伊勢物語」第六段である。(続)

## 人間万事塞翁が馬②

片山 義隆

### ■絶望の日々

家族が帰ると時間に関係なく、「おい！来てくれ」と叫ぶ。他の病室の患者はたまったものではない。看護師には多くの苦情が来たことだろう。

よくあることだが、昼夜逆転である。昼間寝ていると、看護師が来て「片山さん頼むから起きてよ」と言っ起こされるが、直ぐ寝てしまい効果なし、付き添いの家族にも「起こして置いて下さい」と頼まれるも、静かでないでそのままにしておいたらしい。睡眠薬は毎日飲まされていたが、効き目はどうだったのか？ 昼間に効いてしまうのだろう。

一向に動かない体に、担当医師は妻に「このままの状態ですと、ベッドで寝たきりの生活を覚悟して下さい」と告げた。私も担当医師に「先生、この体動くようになるんでしょうか？」と尋ねたところ「うーん、それは神の領域やね」とはぐらかされたが、この言葉は重いもので、ショックであった。

脳障害で直ぐ忘れる当時でも、この言葉はしっかりと覚えており、その後うつ症状となり、気持が沈んでいった。

医師というもの、精神面も考え、「君の努力次第ですよ」と言ってくれば、

どれだけ勇気を貰ったことだろう、そんな配慮が必要ではないかと思う。

病室も私の落ち込んだ重い空気に包まれる。「死にたい、死にたい」と呟くようになり、交代で看病にくる妻や娘はいろんな面で先行き不透明な現状、不安や心配で一杯、遠くて重たい自宅から病院までの道のりだったろう。

妻の看病の時は必ず屋上へ行くのをせがむ、当時は頭部まで背もたれの付いた長いリクライニング式車をベツド状にして、妻が押し狭い角もぎりに曲がる。屋上に着けば必ず向けてもらう方向がある。そこは警察本部の建物が見える場所で、1時間位何も言わずただ眺めていたそう。私は何を思いながら眺めていたのだろうか？ 屋上には職員の食堂があり、妻が押してくる長いリクライニング式車いすの操縦に職員の間で関心が集まったらしい。

一度娘に連れて行ってもらったが、角が曲がれず途中で断念した。まあ気分転換に根気よく車いすで売店や病院内も連れて回ってくれた。

### ■一筋の希望の光

2週間もたった頃だろうか、それまでピクリとも動かなかった手の指が自分の意思で動いた。些細なことであるが、妻や娘と喜んだものである。



次に更に1週間後には肘から手が上がりまがるようになり、足も少しではあるが動くようになった。

こうなるとリハビリ室へ出かけてのリハビリ訓練、普通の車いすに座れるようになり、今までのような大仰しさは無い。しかしリハビリ時間は1日30分と少ない。

そんな中職場の上司が「おめでとう！ 警部補に昇任しB署にご栄転です。」と人事異動の報告に来てくれたが、この体では何の喜びも感動も無く、新所属署に迷惑をかけて申し訳ないと言ふ気持ちで一杯であった。

数日後、新所属の担当課長が見舞いに来てくれたが、その表情を見ると『厄介者を背負ったな』という思いが読み取れ、本当に心苦しいが「迷惑おかけして申し訳ありません」と謝るほかなかった。こんな重要な面会での報告を貰った状況も記憶になく家族からの伝聞である。

日が経つにつれ、妻も今後の入院費が心配になってくる、「お父さん生命保

険は入ってるの？」と尋ねるも、まだ脳障害で「さーあ、分からん」と曖昧な返事をする。

生命保険は全て私が警察で斡旋するものに加わっていて妻は何も知らない、「貯金を切り崩してでも何とかかなる」と妻は腹をくくらねばならなかつたろう。

4週間経った頃だろうか、自制心も出来て、その日の記憶もおぼろげながらも思い出せるようになり、自己制御もできるようになったと自覚してきたことから、入院以来服用され続けた睡眠薬をやめてくれるよう看護師に訴えたと「片山さん飲んだ方がゆつくり休めていいよ」と服用を勧めらるも「睡眠薬は体に良くないと思うので止めて下さい」と頑なに断つたため、看護師はしぶしぶ了承した。

看護師詰所では「片山さんが睡眠薬断つた。今日は夜中叫ぶから大変よ」と話題に上ったと想像がつく。しかし、嬉しい誤算である。

自制心が戻ってきた私は静かなものがある。以来看護師の私に対する接し方も180度変わり、必要以外呼んでも来る事になかった看護師たちも訪ねてくるようになり「片山さんてこんなもの静かな人やつたんですね」と言っ世間話をするようになる。

私は手が麻痺しているので、看護師呼び出しはブザーではなく、息を吹きかけるこ



とで感知する呼び出し装置が顔の上に設置されているのであるが、ある晩、私のいびきで反応してしまい即座に「片山さんどうされました。」とスピーカーから看護師の声、素早い対応である。今まで呼べども、呼べども無反応であった事を考えると可笑しかった。

妻は担当看護師に相談、「悔いの残らないよう自分達の思うようにした方がいいですよ」と助言をもらい、意を強くした妻は私の消極的な意見は無視し、直ぐ行動に移した。

N病院相談室に行き「七栗サナトリウムへ転院したいので紹介してくれませんか？」と相談するも、最初は「いままで転院した人も無く、道が無いので」と消極的だったが、妻の強い意志に押されて「それでは連絡をとります」と渋々了解してくれました。

決意も新たに何時も通っているN病院から自宅に帰りつき一息ついた妻が、何気なく付けたテレビの『三重県榑原温泉にある藤田保健衛生大学病院七栗サナトリウムのリハビリ特集』番組にくり付け

院長も回診で「そんな遠いところ行かなくてここで頑張ったら」と慰留してくれて、入院し一カ月過ぎた頃、三重県七栗サナトリウムへの転院が決まった。

脳梗塞で倒れ全く動けない患者を機械で立たせる初期の状況から、数か月で外を歩けるまでになるリハビリ訓練の様子と、「発症から一カ月以内であれば、本人次第ですが、歩けるように回復する」と

10月18日に介護タクシーで出発するに当たり、前日には担当の看護師が、バリカンで送別の散髪をしてくれたが、上手い下手は別にして、その親切心が有難かった。

今の病院のリハビリ時間の少なさを考えると、どうしても余計なことを考えようつ状態が改善しない。この施設ならリハビリに集中できそうな環境のようだし、どうしよう転院の日が来た、担当看護師も

わざわざ休日にもかかわらず見送りに来てくれた。ここに入院して、ここに入れてくれた。

うにかして歩くようになってほしいの思いから、遠距離であるが、ここに入院しようと思った。

介護タクシーの後部のストレッチャーに横たわり午前6時看護師に見送られながら出発した。

組を話してくれた。「三重県と遠距離やけど転院しよ」と言うが、入院以降すつか

一カ月以上過ごしたN病院がリヤガラ

スを通して遠のいていく。脳障害の時はいく。脳障害の時はいく。脳障害の時はいく。

朝の家事を犠牲にして毎朝食事介助に来てくれた姉に対して申し訳なかつた心で詫びると共に、忸怩たる思いであった。

車は私の思いに関係なく目的地へと進んでいく。寂しい、心細い「本当に歩けるようになるんやろか」と

私の病室は新館4階。幅の広い廊下を挟んで、病室とリハビリ訓練室に分かれており、リハビリ室も旧館との連絡通路を挟んで理学療法室と作業療法室に分かれている。理学療法室はどんな訓練をするところかと言うと、主に歩ける事を主体にした訓練をする所で、作業療法室は手や指の機能回復や日常生活に必要な訓練をする所である。

三重県までは本当に遠い。私は、尿道に入れたカテーテル(柔らかい管)を通して尿が尿袋に溜まるようになっていから下車する必要はないが、ストレッチャーに横たわったままの移動は、とにかくしんどく、私が好んできたわけが無いので、何か腹が立つ。

同病院は出来る事は自分でやらせるというのが方針らしく、食事は食堂で入院患者と一緒に食べる。食後の歯ブラシは洗面所に行き自分で磨く。移動は車いすで移動するのであるが、今までは、個室で家族に食べさせてもらい、歯を磨いてもらい、移動は車いすを押してもらっていた。これからは甘えを払拭して出来る事は自分でやらなければならないのだと決意を新たにしました。

約3時間の乗車、リヤガラスから見える風景は緑一杯の田舎であるが「本当にこんな所にそんな立派な病院があるのか？」と心配になる。

さっそく食堂へ昼食を食べに行くことになったが、両手が麻痺しており、特に右手がきついたので手でこぐ事ができないためでこぐが、利き足の右が麻痺がきついで左足でこぐ。ゆっくりしか前に進まない。これ毎日続くかと思うと、先が大変

そんな心配をよそにやつと到着し、ストレッチャーから車いすに移動してもらおうと、眼前には緑の丘陵地に横に広い白色の大きな5階建ビルが建っていた。ここが七栗サナトリウムである。

これが毎日続くかと思うと、先が大変

■新たな入院生活の始まり

いよいよ新天地での入院生活のは

いよいよ新天地での入院生活のは

これが毎日続くかと思うと、先が大変

だ。

やつとの思いで食堂に着く、入院患者40人位がテーブルに着き食事をするが、隣は90歳代の同室のおじいちゃんだった。

私は箸が使えないのでおにぎりにしてもらい、おかずはスプーンとフォークで食べるが、味は段違いに前の病院が美味しかった。

食後は歯磨きであるが、食堂から20メートル先の洗面所までまた車いすでの移動である。遅いのでどんどん抜かれ、その先は渋滞である。先に歯磨きをして

いる人を待たなければならぬ、20分

ゆっくり前に移動しやつと番がまわってくる。介護士さんが居て自分の歯磨き

セットを渡してくれる。入院以来初めて自分で歯磨きであるが、何とか

磨けた。

午後から診察であるが、担当医師は40歳位の女医であった。

最初に女医が「屈辱的なテストをしますが、がまんしてくださいね」と言っ

て始めたのが記憶力テスト。簡単な鳥や花や鉛筆等の絵を5、6枚見せておいて、

絵を隠し「これは何でしたか？」と質問する。私は幼児テストのようなレベルの

質問に答えながら、本当に屈辱的でプライドもズタズタだが、「脳障害の状態を調

べるためには必要な事なんだ」と思い、割り切ったら心も落ち着いた。

後は手足の麻痺の状態の検査、この検

査で初めて気が付いた事があった。それは、足の麻痺が右よりまだましな左足

は、足先から付け根まで痛覚が全く無く痺れもきついのをたいして、麻痺のきつ

い右足は感覚があることである。どうゆう神経の損傷のいたずらなのか不思議

であり驚きでもある。

最後に首と脳のレントゲンを撮影した後、尿道のカテーテルを抜き尿袋とも

おさらばとなった。

診察も終わり病室に戻って、尿意を感じ

るであろうか、ととっても心配であったが……、「尿意を感じる、感じる。よ

かった嬉しい」。車いすでトイレに行く。「出た！」暫くぶりの自発的放尿に爽快

感を味わった。

就寝後はベッドの呼びブザーを押すと、介護士が尿びんを持って駆け付けて

くれる。手が麻痺しているので全て処理してくれ、若い女性の介護士もいるが、

こんな体になると恥ずかしさは無く、抵抗感も無い

であるが、前の病院とはリハビリ施設の

規模や理学療法士、作業療法士の人数など桁違いであり、だだっ広い病室前の廊

下も歩行訓練場だ。

入院患者には主と副の療法士が付き、

主療法士が居ない日は副療法士が担当

してくれる。

私担当の主理学療法士は20歳代の

女性で河合先生。名前のとおりかわいい

先生だったが、その容姿とは裏腹にシビアで妥協は無く厳しい。そして主作業療

法士は30歳位の男の先生であるが、この先生は太ってもいないのに無類の汗

つかきで、マッサージをしてくれるだけで汗が滴り落ちる。季節的に暑くも無い

のに見えて可笑しくなるが、一生懸命訓練をやってくれる。

理学療法は最初に椅子に座ったり立ち上がったりの訓練であるが、腹筋が無

くなったので踏ん張りがきかないので、そのまま座ると「ドスン」とお尻が椅子

に落ちるのでお尻が痛い。立ち上がる

のは全く立てない。健常者の時何気なく

立った座ったりしていたのは腹筋の

効果なのだ気付いた。

理学療法士が倒れないように私をサ

ポートしながら「上体を前に倒しながら

座ったり立ち上がったりと出来る

から」との教えどおり上体を前かがみに

しながら、腹筋の無いのをカバーして何

回も何回も失敗しながらも何とかでき

るようになった。

次は左右に手すりの付いた器具での歩

行訓練、なかなか足が前へ出ない。肩に

力が入り手すりの棒から手を前へ移動できないが、療法士から「肩の力を抜いてリラックスしましょう」とアドバイスを受け、足をスムーズに出せるよう『電動ウォーキング』に乗り頭上から体をベルトで足が付く程度に吊るしてもらい、強制的にベルト上を歩くのであるが、これで数日歩いた事により、少しずつゆっ

くり歩けるようになってきた。

作業療法は汗っかき先生が初めに汗

をしたたらせながらマッサージをして

くれ、最初はテーブルでの手の機能回復

訓練が主体となる

こんな訓練で、毎日余計な事を考える事も無く、うつ症状も解消された。

私の病室は3人。一人は、自転車で側

溝へ落下し腰部の脊髄を損傷した70

歳前半の三重県津市の男性。この人は多趣味で、油絵や津軽三味線を弾いていた



手すりにすがって歩行訓練

### ■リハビリ訓練の始まり

さあ、翌日からリハビリ訓練の始まり

らしい。油絵は2、3枚見せてもらったが、自慢するだけの事はあり、上手かった。

2人目は食事時、隣に座る90歳代の三重県熊野のおじいちゃん。脳梗塞の後遺症言語障害の発声訓練と歩行訓練だ。家までは車道が無く熊野川を自前の船で行き来するのが交通手段らしい。熊野ってすごい！ やっぱり神話の時代から神々の鎮まる特別な所と言われるだけの事はある。

おじいちゃんは私の所へ写真のアルバムを持参し不自由な口調で説明してくれる。写真は『寒蘭』で寒蘭栽培の第一人者らしく写真をあれこれ説明してくれるが、興味も無くよく判らない。しかし「ふん、ふん」と聞いてやる。

何回か女性記者が見舞いに来たので「本当だったんだ」とおじいちゃんを見直した。また何回か寒蘭の写真を見せにくる。おじいちゃんの生きがいだったんだろう

こんな人生の先輩達との生活。たわいない話をして過ごせ、気がまぎれていいものだ。

半月程してあと1人入院してきた。脳梗塞で倒れた70歳代後半の三重県伊勢志摩の男性で、この人は若い時はクジラの遠洋漁業に出漁し、陸より海の生活が長かったと言っていた。

定員の4人となった。

### 百まで生きろ

九四になる伯父がボケはじめた。頭に水がたまつて脳を圧迫しているのが主たる原因らしい。手術という選択肢もあるが、年齢を考えると、医者は勧めない。家族は躊躇しながらも、手術はしないことに決めた。伯父のボケを受け入れることにしたのだ。

話を聞くと、ボケたといっても、僕から見れば大したことはないように思えるのだが、いっしょに暮らす家族にはたいへんなようだ。家族でそば屋を営んでいるので、伯父に振り回されることで、店の仕事にひびいてくる。

伯父は昼間寝ていて、夜になるとゴソゴソ動き出す。そして事を起こす。皆が寝静まった夜半、廊下を歩く音とともに、ボトボトとこぼれるなーんかイヤな音が聞こえてきた。それが何の音なのか、確信をもって予想したのは従兄の嫁だった。

ふとんから飛び起きて、廊下に出ると、予想どおりというか、予想を超える光景に後ずさりし、呆然とした。それは、伯父の部屋からトイレにつづいていた。

従兄が、そして息子も起きてくる。従兄はトイレにいる伯父をわかりつける。伯父は、ボケているとはいえ、自分のしでかした粗相がどんなことなのか、理解しているのだ。息子の怒鳴り声に身体を硬直させてうなだれている。

従兄の息子は、母親とともに始末にかかる。家はこの春に新築したばかり、住みはじめてまだ三カ月だ。そのうえ、従兄の息子には生まれたての娘がいる。とにかくきれいに掃除をしなくてはならない。板と板の間の目地は歯ブラシをつかってこそげ取った。すっきりきれいに掃除し終わる頃には、夜が明けていた。その日、店は昼は営業したが、夜の部は閉じた。

若い頃から伯父は食欲が旺盛だった。従兄にいわせると、いまも家族の中でいちばんよく食べるそうだ。とくに甘いものに目がない。食は旺盛だが、酒はまったく飲めない。

その下戸の伯父が、ある晩赤い顔をして、体を掻きむしっていた。酒を飲んでにちがいない。従兄は問い詰める。「冷蔵庫のあったビールを飲んだだろ」。伯父は「飲んでない」といって、身体をこわばらせながら目を伏せる。

ビールを飲んだことよりも、爪を立てて体中を掻いているので、血がにじんでみみず腫れのような傷が全身にのこり、痛々しいのだ。きちんと手当てしないと、化膿しかねない。従兄の息子が「じいちゃん、ビールうまかった？」と訊くと…。(つづく)

### 俳句

土田 裕

- 湯の街をさつと過ぎ行く夕時雨
- 家中の布団干しつつ母思ふ
- 箒目の上に枯葉の二つ三つ
- 万葉の歌碑に添ふごと帰り花
- 地の果てに西の海あり冬霞（欧州最西端、ロカ岬にて）
- 晶男
- 東北の新米合格よきたより
- 原発禍地面の修復長き秋

### 編集後記

前号から、大江雉兎さんが、「芥川」考を投稿頂きました。彼は、日本の古典文学、とりわけ源氏物語の研究に熱心だったと聞いております。今後が楽しみです。

エッセイ集「夜道」をお読み頂いた方から朗読に使いたいとお聞きして、私はヒラメキました。聞きにくい私の声ですが、老人施設で望郷の念をお持ちの方々に、エッセイの朗読と対話の会をささやかに開いたら喜んでもらえるのではないかと。

私は、朗読の自信は全く無いのですが、人の話を聞く術は持っていると思っております。高年齢者の方々の人生を楽しく聞いて、生き様の面白さを更に深めたいと思つたのです。とりあえず、朗読の基本を勉強します。(嘉)

老人健診

状差しに突っ込んだままの大判の書類封筒には、五、六枚の印刷物が入っていた。

どうやら後期高齢者医療健康診査を受けるように、との通知であった。別に変わった事もないので、そのまま忘れる事にしていった。いわゆる老人健診の事である。毎年受診しているので特に目新しい事ではない。

「はい」と「いいえ」。「バスや電車で一人で外出してますか」「階段を手すりや壁をつたわらずに昇っていますか」「椅子に座った状態から何もつかまらずに立ち上がっていますか」「半年前に比べて固いものが食べにくくなりましたか」などと質問が続く。

読んでいるうちに気が重くなってきた。自分がそういう事を問われる年令は過ぎていくけれど面白くなかった。たとえ「いいえ」と否定しても、いろんな質問をつきつけられる事によって不当に老いの形の中へ追い込まれていく気分になってしま

う。老いとは人に言われて初めて本人が気づくものなのだ。不快な質問だけど自分の年令に向けられた外部の声なのだから仕方がない。

高齢者は今や、「後期」であったり「特定」であったりと様々な呼び名に応えて生きていかなければならぬ時代に入ったようである。

ナデシコ

（ナデシコ）は明るい野原に赤やピンクの花を咲かせる。（大和撫子）はそれにととえて、日本の女性の清楚な美しさをたたえる言葉。

サッカーの女子日本代表「なでしこジャパン」。それに加えて強さ、賢さ、機敏さを備えた素晴らしいチーム。

私は、スポーツには無関心だけれど、あまりにも「なでしこ、ナデシコ」という声援が心をゆさぶる。わからないまま画面に視線を当てて。

先づ感じた事は、チームが一丸となった勝利、機敏なパスまわし、運動量の多い事。みごと、見事というほかはない。胸のすく思いで見えていたが、何かが自分の頭をかすめる。

「なでしこ」、この音量…、踊って心に灯一丸となって支えなければ、こんなよろこびの灯はつかないことを…。



携帯エッセイ 36

禁酒

禁酒することにした。「そろそろ酒を止めないと長生き出来そうにない」と痛感したからである。

一つは持病の痛風の悪化である。発症の回数が増え、期間が長くなって、慢性化してきた。さらに悪化すると腎臓を患い、人工透析しなければならぬ。

もう一つは転倒である。七月二十二日に深酒をして自宅への帰路についた。登り道なので途中で少し休もうと思つてガードレールに腰を掛けたのがいけなかった。ウトウトして後ろにひっくり返ってしまった。落ちたところが深い溝で、左肩を強打し、鎖骨にひびが入った。

翌朝、病院に行くと全治一カ月と診断された。

おまけがある。肩の痛みを抑えるために飲んでいた薬で胃潰瘍になった。胃カメラを飲んでみたら胃の内壁の

一部が白くなっていた。こちらは全治三カ月。

これだけの『不祥事』が重なれば禁酒を決意せざるを得ない。

禁酒は難しい。今までにも何回か取り組んで来た。しかし、いずれも失敗してきた。だから融通を利かして取り組む。付き合いで必要な時は飲むことにしている。

今日（十月二十二日）で禁酒して三カ月になる。その間に一回だけ付き合いで飲酒した。旨かった。たまに飲む酒は百薬の長だ。《龍》



『人気のデザイン』

好評につき、もういち度！

キルト綿入り  
コート・仕立て  
¥28,000+TAX  
(¥29400)

キルト綿付き裏地の在庫がなくなりましたら終了。

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~